

朝日庄内の風

令和7年9月3日 第34号

朝日庄内森林生態系保全センター

CONTENTS

開山祭に出席しました	2
あさひ小学校 大鳥自然教室	3
中・大型哺乳類調査開始	5
オオハンゴンソウ駆除作業	7
合同パトロール 一大鳥池	8
コラム：大鳥池の魚類相	9



タキタロウ、の幼魚と思われるイワナ

2024.8.10 鶴岡市 大鳥池 (撮影:有本 実)

所長の独り言

朝日庄内森林生態系保全センター所長 岩間 由文

梅雨明け後の十日間は太平洋高気圧に覆われて晴天が続き、登山をはじめとする夏の行楽のベストシーズンと言われていました。

東北南部では7月18日に梅雨明けとなりましたが、その後連日30度を超える危険な暑さが続きました。9月に入ってもまだまだ残暑が続きます。これまで東北地方においては、お盆が過ぎれば涼しくなって、秋の気配さえ感じることができましたが、今は全くそのように感じられません。

アメダスのデータを拾ってみますと、当センターが所在する鶴岡市において、通年のデータがある昭和52(1977)年夏場の6月平均気温は19.4度、7月23.2度、8月23.0度、9月20.2度に対し、今年の6月は22.3度(+2.9度)、7月27.6度(+4.4度)、8月27.0度(+4.0度)と、気温が上昇しているようです(9月2日現在)。

ある山小屋さんのHPにおいて「山は涼しいという考え方は通用しません…この暑さでの登山は熱中症や脱水のリスクが非常に高く」とコメントされていました。「涼を求めて」の登山も過去のもの、登山のベストシーズンが変わってきているかもしれません。



せめて視覚には涼を…
ウドの線香花火

開山祭に出席しました

令和7年5月31日に朝日連峰大鳥登山口安全祈願祭、6月15日に朝日連峰夏山開き式典(鳥原山朝日嶽神社)、7月1日に月山開山祭に出席しました。



萌黄色の新緑の中、純白のタムシバが引き立ちます



朝日嶽神社直下の残雪

鳥原山には、平成20年に当センターの合同パトロールで登って以来17年ぶり。朝方までの雨でぬかるんだ道に足を取られ、体力の低下を痛切に感じながらなんとか登頂。山頂付近の木道の脇にはタムシバが咲き乱れ、豊かな池塘が水を湛えていました。朝日嶽神社前には多くの関係者が集まり、地元の熱意に圧倒。昼には青空も垣間見え、雪が多く残る稜線を、またブナの新緑と白い樹幹を見ながら下山しました。



雪渓を慎重に登ります

月山開山祭は曇り時々晴れ間、そして小雨と目まぐるしく変わる天候の下、山頂を目指しました。登山道沿いには、ニッコウキスゲ、イワカガミ、シラネアオイ、ハクサンイチゲ、ミヤマウスユキソウなど多くの高山植物を確認。種類の多さと大きな群落に感動。2か所ほど雪渓を渡りましたが、6月後半からの晴天のためか前年度と比べて雪は少なく感じました。オニヤンマがクロユリを掴んで



クロユリで雨宿りする
オニヤンマ

で休む珍しい姿を見ることができました。山頂の神社に多くの方が参詣しました。今シーズンの山の安全を祈るばかりです。(岩間)

あさひ小学校 大鳥自然教室

朝日自然塾 みんなで歩こう六十里越街道

鶴岡市立あさひ小学校の5年生を対象とした自然教室として、六十里越街道登山と森林整備学習が7月3、4日の2日間で行われました。当センターでは『朝日自然塾』として、出羽三山の自然を守る会と山形県山岳連盟 鶴岡山岳会にご協力いただき実施しております。

初日の六十里越街道登山は晴天に恵まれましたが、「これは暑くなりそうだ」と心配しながらのスタートとなりました。七ッ滝駐車場から湯殿山神社までの約8kmを、6時間かけて登りました。出



街道沿いのブナ林内では暑さも和らぎます



街道の史跡の目玉・大掘抜(オホノギ)を満喫



「昭和七年五月八日…」と刻まれた鉋目に、当時の積雪量や状況を想像してみます



午後の蒸し暑い時間帯、
オニシモツケが咲く湧水でクールダウン

発地点で準備体操をした後に、児童たちは和気あいあいと出発しました。

六十里越街道は庄内地方と内陸を結ぶ古代から開かれた山岳道と伝えられており、室町、江戸時代には出羽三山をめぐる歩いた行者や物資を運ぶための庶民の生活にも欠かせない道でした。山道を登ると周りは美しいブナの森となり、途中には数多くの史跡があり、児童たちは地元ガイドさんからの史跡についての説明や周りの植物や生き物を観察しながらの登山となりました。



“懺悔懺悔！六根清浄！”と声高らかに元氣よく登りたいザンゲ坂ですが、虫の息…

独鈷茶屋跡の水場では、冷たい独鈷清水を飲んで自然を体感していました。この日は湿度が高く非常に暑かったため、徐々に児童たちの口数が減ってきていると感じました。休憩をこまめにとり、最後の難所であるザンゲ坂をなんとか登り切り、湯殿山神社に到着しました。大鳥居前での記念撮影では、児童たちがそろって笑顔を見せてくれて一安心しました。児童たちにとっては過酷な登山だったと思いますが、この経験を忘れずにたくさんのことに挑戦してほしいと思います。

森林保全活動

六十里越街道登山の翌日は、鶴岡市大鳥地区にある朝日山地森林生態系保護地域内のスギ林内の広葉樹を育てるための作業を行いました。事前学習として6月16日に森林の働きや森林の整備について学習し、7月4日の当日は6班に分かれて実際に鋸で木を切る作業を体験しました。



誰かがきつと食べにくる
森のごちそう ヤマグワ



日本の森林についてクイズ形式で学習しました



連日の蒸し暑い中での作業に、汗が噴き出ます

作業前に職員から森林整備の必要性や作業のおさらいをしてから作業を始めました。前日の疲れや慣れない鋸に苦戦しながらも、交代しながら木を倒すことができました。「この木は何歳だろう」「どういう風に育ったのかな」など、ただ木を倒すだけでなく木のことを知ってもらえるように説明しながら作業しました。木を大切に使うために、倒した木を使って輪切りのコースター作りにも挑戦しました。輪切りにした木は紙やすりで磨き、自分だけのコースターを作ることができました。



鋸は引くときに切れる！と
体得してくれました

2日間の自然教室では、長時間の登山や自然観察、森林の働きや森林整備の大変さを体験しました。この体験が少しでも森林を大切にしたいという気持ちに繋がることを願っています。（工藤）



作業する脇に生えていたホオノキ。スギを
切ってこれら広葉樹の生育を促します。



毎年この自然教室でこの林を整備していて、スギの
下層には広葉樹がかなり生長してきました

中・大型哺乳類調査開始



設置中のセンサーカメラ

昨年 11 月に発行しました本誌第 31 号の中で、“朝日山地でセンサーカメラを用いた中・大型哺乳類調査（以下、カメラトラップ）を検討中”とご紹介していましたが、今年の6月中旬～7月上旬にかけて、試行的に 10 箇所にカメラを設置してきました。朝日山地ではニホンジカ（以下、シカ）の侵入状況を把握するため、令和元年度より東北森林管理局においてボイストラップというシカの鳴き声を録音する調査を継続してきましたが、シカの生息密度の判断材料とするため、またイノシシや外来哺乳類等の生息状況も継続してモニタリングしたいため、カメラトラップも追加で行うことにしました。



森林生態系保護地域の看板も
同時併行で設置していきました



カモシカと思われる糞が落ちていた小道に向けてカメラを設置。他の哺乳類も行き交いそうです。



【センサーカメラの画角】



アライグマの足跡が沢山見られた池の畔にカメラを設置。イノシシやシカのヌタ場にもなりそうです。



【センサーカメラの画角】

ボイストラップを始めた当初の計画では、シカの鳴き声が録音された調査地ではセンサーカメラで個体を確認することになっていましたので、毎年ボイストラップを設置している10地点の周辺に1台ずつカメラを設置しました。現場に残された糞や足跡などのフィールドサインを参考に、シカはもちろん、その他の哺乳類が歩きそうな歩道や沢沿いなどを狙って設置します。電池の減り具合や誤作動の状況などを確認するため、約1ヶ月後にデータを回収してきたところ、早速ツキノワグマやイノシシなどが撮影されていました。これから降雪前の晩秋まで設置して、撮影された種と個体数を記録していきます。(有本)



小沢沿いの歩道で撮影されたツキノワグマ



左のクマと同じ場所で撮影されたイノシシ。
歩きやすい所を歩くのは人間と同じです。

オオハンゴンソウ駆除作業

今年度もオオハンゴンソウの駆除作業を7月12日に行いました。私が着任して3年目ですが着実に成果が出ていると感じるものの、根絶には至っていません。平成29年に朝日鉱泉周辺で生育が確認されてから、今年で9年目の駆除作業になります。なぜ毎年欠かさずに作業を行っているかというと、オオハンゴンソウは特定外来生物という環境省が設定している日本の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種に指定されているためです。簡単に言えば、強い繁殖力で在来植物を駆逐してしまう恐れがある植物だということです。ご自宅の庭などに咲いていないか、今一度ご確認お願いいたします。

オオハンゴンソウは地下茎が発達しますので、駆除する際は根から全て取り除かなければなりません。地上部を取っても再び生えてきます。これが非常に厄介なのです。掘り取る際に根を切って地中に残してしまえば、今年の種子散布は抑えられますが、来年は何事もなかったように生えてきます。

掘り取っている最中にずいぶん根が太いものを見かけますが、根を残してしまったものなのかもしれません。やはりこの繁茂した雑草の中からオオハンゴンソウを探すため、どうしても見落としがあります。早い時期に行うとオオハンゴンソウが小さく、こちらも見落としにつながります。どの時期が良いのかはわかりませんが、経験上オオハンゴンソウがそれなりに生長して他の雑草が背丈より繁茂しない辺りが良いのではないかと個人的には思います。今後も当センターでは駆除作業を継続していきます。(工藤)



目立たない日陰に昨年見落としした株が！



根ごと掘り取った株をゴミ袋に詰めます。
こんなにも見落とししていたとは…

【大株】



【中株】



【小株】



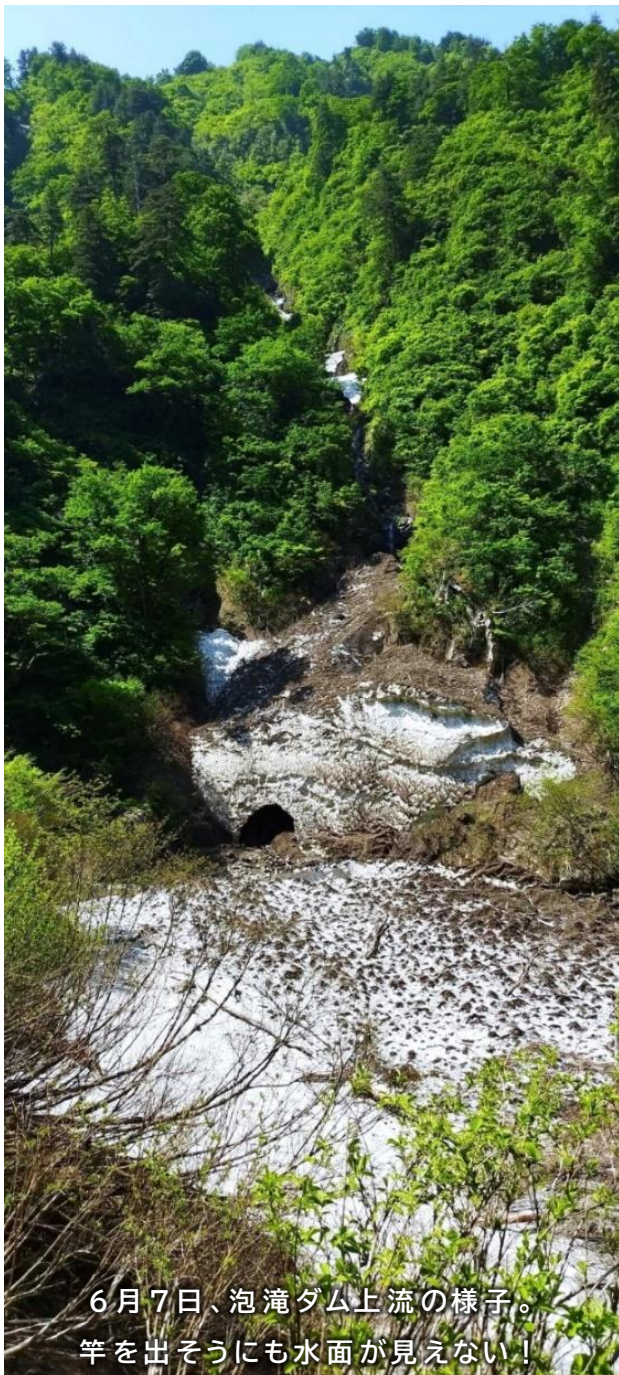
オオハンゴンソウは発育段階によって葉の形状が異なりますが、特徴的なゴワゴワした触感を覚えれば、ヨモギなどの類似種と間違えることはありません。

合同パトロール ー大鳥池ー

そろそろ残雪は落ち着いたか？と今年最初に私が大鳥池の登山口を訪れたのは6月7日。泡滝ダム上流でのプライベートの釣行でしたが、登山道を歩き始めて間もなく、谷が雪で埋もれた衝撃の光景を目の当たりにして早々に撤退しました。この前日から以東岳避難小屋やタキタロウ山荘の小屋開け作業が行われていたことを下山後に知り、彼らの超人ぶりに驚嘆したものです。詳細は東北地方環境事務所のアクティブレジャー日記『朝日連峰・以東岳避難小屋 越冬後施設点検』(https://tohoku.env.go.jp/blog/2025/07/page_00015.html)をご覧ください。

7月24日の合同パトロールは、雪に埋もれていた登山道がようやく顔を出してから間もないタイミングでした。参加者は合計15名という大所帯で、朝日山地巡視員の他に羽黒自然保護官事務所や山形県庄内総合支庁からもお越しいただきました。快晴の夏空の下、燦々と照り付ける陽射しの中を登山口から大鳥池まで往復してきましたが、ゴミの投棄や山野草の盗掘跡といった特段の異常は見受けられませんでした。終日暑くてなかなか大変でしたが…

今年の豪雪の影響でしょう、登山道周辺に太いブナの倒木が多く見られましたが、歩行に支障をきたさないように刻まれて道の脇に寄せられていました。また、足場の悪い箇所はピンクテープで明示され、さ



6月7日、泡滝ダム上流の様子。
竿を出そうにも水面が見えない！



適切に処理されたブナの倒木。ここまでチェーンソーを担ぎ上げるだけでも大変なはず、感謝しきりです。



ピンクテープで明示された危険箇所。ここで足を踏み外すと、谷底まで数十 m 滑落するので要注意。

らに数日前には登山口から大鳥池まで刈払いも行われていて、快適なパトロールとなりました。こんな猛暑の中でも登山道の維持管理にご尽力されている皆様に、心より御礼申し上げます。(有本)



以東岳から下山されてきた登山者に、マナー啓発のパンフレットをお渡ししました



大鳥池を背景に記念撮影。
炎天下の中、お疲れ様でした！

コラム 大鳥池の魚類相 (文・撮影：有本 実、撮影地は全て大鳥池)

タキタロウの生息地としてあまりに有名な大鳥池ですが、私が2007年以降プライベートで幾度となく調査(＝釣り)してきた中で確認できた魚は、僅か3種類にすぎません。まず1種目は、大鳥池の岸辺で沢山群れている小魚、アブラハヤ①です。標高1000m近いこの池には本来生息していないはずで、ここにイワナを放流した際に混入したのでは？という話をタキタロウ山荘の親父さんから伺いました。本来の生息地は河川の中上流域で、イワナがいる源流部では見られません。

2種目は釣り人に人気のヒメマス②で、この魚も本来この池には生息しておらず、やはり放流されたものです。日本のヒメマスの原産地は北海道の阿寒湖とチミケップ湖で、この池のヒメマスは国内外来種なのですが、批判的にならないのはなぜでしょうか？外来種問題について、今一度見つめ直してみましょう。あの十和田湖のヒメマスも北海道から移入されたものです。

3種目は川の最源流部に生息している言わずと知れたイワナですが、大鳥池は前述の通りイ



① アブラハヤ(8cm) 2024.8.11



② ヒメマス(23cm) 2024.6.8

ワナも放流しているため、この池在来のイワナ個体群の体色や斑紋は、もはや不明です。白点が多いエゾイワナ系③が多いですが、紫色が濃い個体④、腹が橙色で白点が小さいニッコウイワナ系⑤、さらに腹の赤味が強い個体などもいて、釣れるイワナの外観は本当にまちまちです。

大鳥地域づくり協議会によって取りまとめられた『タキタロウ調査報告書 2014』によると、大鳥池の水質は電気伝導率が低くてプランクトンも少ないと推測されていて、貧栄養の部類に入ること。そう考えると、大鳥池に生息する魚類はこれら3種のみなのかもしれません。

いやいやタキタロウはどうした！？と思われる方に私の個人的な憶測を述べますと、タキタロウ＝巨大化したイワナ、ではないかと考えています。江戸時代からタキタロウの存在が知られていること、麓の集落では食べたり飼ったりした人がいること、複数人で目撃していること…等々を勘案すると、タキタロウは幻ではなく実在するはずです。そしてそこまで昔から生息しているのであれば、近年人為的に放流された魚ではなく在来種であることは明らかなので、生息環境を加味すると、可能性が最も高いのはイワナでしょう。通常寿命が3年程度のヤマメとは異なり、イワナは環境が整っていれば何年も生き永らえますので、体長が1mを超える可能性も否定できません。

一つ峰を挟んだ八久和川の呂滝では60cm級のイワナが釣れていますので、呂滝の滝壺より遥かに巨大な大鳥池で、しかもタキタロウの餌となるイワナやヒメマスも豊富となれば、イワナが無尽蔵に巨大化しても何ら不思議ではありません。北海道では80cmを超えるアメマス(エゾイワナの降海型)が度々釣られていますので、大鳥池で同等以上のサイズのイワナが釣れる可能性は大いにあり得ます。セツ滝によって海と隔離された大鳥池で巨大化したイワナが、実は独自の進化を遂げて種分化が起こっていれば、それこそ正真正銘『タキタロウ』として新種記載される日が来るかもしれません。どうかこの池で1mを超えるイワナを釣ってサンプル採取し、魚類の専門家に遺伝子解析を依頼したいものです。そんな妄想を抱きつつ、これからも大鳥池で竿を振り続けてみようと思います。



③ イワナ(30cm) 2007.8.12



④ イワナ(30cm) 2025.8.1



⑤ イワナ(34cm) 2025.7.20



発行：林野庁 東北森林管理局 朝日庄内森林生態系保全センター

〒997-0015 山形県鶴岡市末広町 23-37 TEL: 0235-26-1841

<https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/syo/asahi/>

